

マーク・A・マトソン¹

『ヨハネによる福音書』²

高 砂 民 宣 訳

ヨハネによる福音書へのイントロダクション

第四福音書（ヨハネ福音書）はその構造、語調、およびイエスの自己顕現を生き生きと描いている故に、福音書の中でも際立っています。第四福音書はまた、「霊的な福音書」と呼ばれてきました。それは、天から来られたイエスが何処から来られ、何処へ行かれるのか、そしてイエスの生涯を信じることの重要な役割についての問題を非常に明らかに論じているからです。しかしそれは、当時の人々と相互に影響し合う人間としてのイエスの描写に、第四福音書はあまり関心を抱いていないといった考えを抱かせるというものではありません。ヨハネは、イエスの生涯について読む者を魅了する記事を提示すると共に、神とご自分との関係についてイエスが主張したことに対する応答として生じた論争も提示しています。イエスの霊的な解釈は論争を肥大させると共に、イエスをどのように理解するかについての異なる選択、そして最後に、全人類に対する愛という名目でのイエスの自己犠牲についても物語っているのです。

ヨハネ福音書の構造を概観することは、福音書が主に強調している幾つかの考えを私たちに抱かせます。

1. プロットが始まる前に、著者はイエスの物語を神学的なプロローグによって組み立てます。このプロローグにおいて、読者は、このイエスという御方は先在の神の言葉であり、世が創造される時、神と共におられたということを学

ぶのです。そして私たちは、受肉が被造物と神とを和解させ、暗闇に光をもたらそうと企てるものであることを学ぶのです。しかしそうした企ては、悲しい拒絶をもたらすことになります。その悲劇とは、イエスを信じることを拒絶する人々は、神を拒絶することだからです。

2. イエスの生涯の最初の記事は、「しるし」と呼ばれる一連の奇跡によって効果が高められます。この用語は挑発的です。それは、これらの奇跡が、単純な奇跡的活動よりも、より深遠な真実性を示しているからです。「しるし」は福音書全体において連続して行われますが（復活および復活後に続く魚を獲る物語は、「しるし」に数えられるに違いありません）、「しるし」のほとんどは福音書の初めの方に見受けられます。それゆえに、始めの11章はしばしば「しるしの書」と呼ばれます。

3. 「しるし」と、特に最後の晩餐の後には、イエスが様々な人々で行った長い問答、或いは講話が点在しています。これらの講話の中で、イエスのご自分が何者であるか、人々のご自分に対してどのように反応すべきであるかについて、幾つもの劇的な解釈を行っています。これらの言葉は、他の福音書におけるイエスの言葉とは対照的に、明らかに自己顕現（啓示）です。しばしばヨハネ福音書における言葉は、「私は…」で始まる隠喩（メタファー）でかたどられています。例えば、「私は天から降って来たパンである」や「私は世の光である」等がそうです。

4. 物語が進むに連れ、「ユダヤ人」と呼ばれるグループの、イエスに対する抵抗が大きくなって行くことが明かです。ユダヤの人々とも、ユダヤの指導者たちとも同じではないこのグループは、イエスのメッセージおよびイエスその者の両方に対する抵抗を増して行きます。最後の晩餐の前でさえ、彼らはイエスを殺そうと計画するのです。

5. 11章に記されたラザロの復活の後、焦点はイエスの死の予告へと移ります。ヨハネ福音書においてこの死は、「栄光」として粹付けられています。この死はイエスの宿命と常に考えられている故に、そこには悲劇という感覚が少しもありません。十字架におけるこの死において、イエスの使命は明らかにされるのです。さらに、イエスは死ぬことによって神のもとへと戻ります。このように、福音書の終わりはプロローグと繋がっているのです。

6. イエスの公生涯は、1年で構成されていません。その代わり、イエスはエルサレムに何度も戻っているように思われます。イエスの宣教活動は、少なくとも3年続いたとヨハネは理解しています。エルサレムに何度も旅していることも、イエスの物語の特徴を引き立たせています。——地理的な焦点は、ユダヤ人の宗教生活の中心が神殿であることを示します。そしてユダヤ人の宗教生活は、彼らの宗教的な暦と祭りをめぐって構成されていることが分かるのです。

この特徴的な構造は、ヨハネ福音書を他の三つの福音書、すなわち共観福音書（それらは共に観られるので「共観」と呼ばれる）から際立たせます。私たちはヨハネ福音書と共観福音書との関係を、どのように理解すれば良いのでしょうか？一方で、四つのすべての福音書は、イエスの十字架と復活に主に焦点を当てながら、イエスの物語を語っていることは明らかです。そしてすべての福音書において、イエスは奇跡を行われ、当時の宗教的な支配階級からの抵抗に直面しています。また一方で、共観福音書とヨハネ福音書はイエスの物語を著しく異なる仕方で語っているので、両者の間の類似と相違についての説明が幾らか必要があります。この研究の範囲は、実践的な仕方で、両者の関係についての諸問題に充分に従事することは出来ません。私自身の結論は、ヨハネ福音書は他の福音書とは無関係であるということです。つまり、第四福音書は文学的に他の福音書に依存してはいない、しかしその代わり、口頭伝承に依拠しているというものです。けれどもこの結論は、本福音書を読むにあたって重要なことではありません。この研究では、ヨハネ福音書のイエス物

語の独特の性格を明らかにするため、他の福音書との比較がしばしばなされるでしょう。

誰が、いつ、そして何処で？

ヨハネ福音書の独特の構造は、諸資料や最終的な文書に対する編集上の影響について多くの説を引き起こして来ました。ヨハネは執筆に当たって、資料として共観福音書に依拠したか否かという問題に加えて、最終的な福音書に先立つ、より初期の版を見つけることは出来るのか否かという問題があります。そうした学説に最も共通であるのは、「しるしの福音書 (signs Gospel)」とも呼べる、説教のない初期の物語が存在したということです。現在の福音書は多様な段階を踏んで発展してきた物であるというのは充分可能なことですが、この問題は未解決であり、現在正典と認められている福音書を読むのに重要ではありません。それゆえ、この書（研究）において、この問題はほとんど、或いは全く言及されません。

緒論的な問題に対しても、似たような応答が出てくる可能性があります。福音書を書いたのは誰なのか？いつ、何処で、そして誰に対して（書かれたのか）？決定的な答えは出なくても、これらは興味深い問題です。そして最終的には、これらの問題に答えようとする試みは、中心的な福音のメッセージを聞くという正しい道から、読者たちを逸らしてしまうのです。したがって、この後に続く研究では、これらの問題に対してはほとんど考慮しません。誰が福音書を書いたかということを正確に知ることは困難である故に、私は概して福音書のことを第四福音書、そして著者のことを第四福音書記者と呼ぶことにします。しかしながら、私はまた、福音書を「ヨハネの福音書」とも呼び、たまにヨハネを著者と呼ぶこともあります。もっとも、これは実際の著者が誰であるかについての私の判決と受け止められるべきではありませんが。

最後の章で論じるように、福音書の著者は、「イエスが愛した弟子」（或いは「愛弟子」）が目撃者であることを主張しているのは事実です。ヨハネ福音書の

最後の章を真剣に捉えるならば、少なくともこの主張を真実であることの断言と理解すべきです。しかし、私が指摘するように、それは愛弟子とは誰かということを明らかにするものではありません。これは依然として討論すべき問題です。

他の諸問題―著述の時期、場所、福音書の聞き手―は、さらに不明瞭であり、重要な問題ではありません。第四福音書はしばしば、他のキリスト教とは異なる、もしくは追い出された信者たちの共同体に向けて書かれたと見なされます。その上、セクト的な文書とも見なされます。私はこの考えには納得しません。何か全く異なることを主張していると思われます。なぜならば、もしも第四福音書がイエスを既に信じているセクト的なグループによって書かれた、或いはそうしたグループに向けて書かれたのであれば、信仰を生み出すよう企てる（20：30～31）と主張することは、おかしいことだからです。それはまた、パレスチナの外部では起こるとしばしば信じられていますが、ヨハネ福音書はユダヤの地形や暦の問題に対して、他の福音書よりもいろいろな仕方で多くの注意を払っています。実際、ヨハネ福音書は他の福音書よりも、よりユダヤ的であり、よりパレスチナ的です。最後に、この福音書はしばしば、1世紀の終わり近くか、もしかすると2世紀の始めといったように、だいぶ遅くに書かれた物と考えられています。もう一度言いますが、私はこれらの議論が不可避免的なものとは思いません。しかしこれらの序章的な問題についての推測がどうであれ、それらはたいてい読者を福音書のメッセージに対する大いなる洞察へと誘うものではないのです。メッセージはそれ自体に基づいているのであり、この研究において私が強調しようと試みたのは、メッセージの展開する力なのです。

神学的な諸観点

第四福音書を研究する上でより重要なことは、著者がイエスの物語を解釈することによる幾つかの重要な神学的観点に気付く（を意識する）ことです。こ

れらの多くは、この福音書の研究がそれらを探求するに連れて明らかになります。しかし福音書を研究する間、ずっと心に留めておくべきいくつかのより重要な特徴を強調することは、価値あることかもしれません。

最初の特徴は、著者の堅固な二元的パースペクティブです。第四福音書記者はしばしば、イエスの伝道（使命 mission）を、明らかに対象をなす正反対の事物という点から投げ掛けます。最も顕著なのは、光と闇というモチーフです。イエスは光であり、彼は闇の世へと来られます。光と闇という二元論は、天をこの世から分離することに相当します。この二元論は、イエスに対する抵抗が、偽りと真実、この世の支配者と神として投げ掛けられる（铸造される）、福音書の対話の幾つかに見受けられます。この二元論はよく、ギリシア或いはヘレニズム思想のヨハネ福音書に対する影響の形跡（しるし）であると断言されました。しかし死海写本の発見が、そのような二元論は1世紀のユダヤ教にも同様に共通してあったことを明らかにしました。

第二の特徴は、「ユダヤ人」によるイエスに対する強い抵抗です。プロローグは、言が「自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった」というコメントで始まっています。この観点は、多くのプロットに対する基本として、福音書全体の情報を提供しています。「ユダヤ人」による抵抗のため、イエスはエルサレムを出たり入ったりします。そしてイエスの説教の多くは、この抵抗との戦いです。受難物語において、「ユダヤ人」による抵抗はイエスに死を招きます—実際、彼ら（ユダヤ人たち）がイエスを十字架につけたと見なすのは、この福音書においてかなり特有なことです。しかし Unit 9において議論するように、「ユダヤ人」とは誰かと正体を正しく明らかにすることは挑戦的です。イエスは（ユダヤ教の）多くの伝承を断言している故に、この用語は単にユダヤ教を意味するものではありません。また、多くのユダヤ人が（イエスを）信じるようになった故に、この用語はユダヤ人すべてを指して言っているのではありません。その代わり、ヨハネの文学的な創作と見なすべきであり、手短に言えば、「自分の民」によってイエスは拒絶されたと言及すべきです。この用語は文学的な工夫（device）であり、ユダヤ教全体を意味すると受け取

るべきではありません。それゆえ、この区別を強調するため、この研究（本）全体を通して、この用語は「ユダヤ人」と括弧付きで記すものとします。

最後に、第三の特徴は、第四福音書記者がイエスを「天から」来た者であり、天へと還る者と理解している点です。この降下と上昇（昇天）という概念は、福音書全体に行き渡っており、イエスの神との関係についての描写を知らせるものです。イエスは神との間に優先的な関係を持っており、神によってこの世へと「派遣」されたのです。その結果、共観福音書よりもこのヨハネ福音書において、いくぶんイエスは常に、神としてより鮮明に描かれているのです。著者はイエスの人性を強調するのにとても苦勞していますが、イエスの地上の出所（血統）を常に考慮に入れています。イエスは神と親密な関係を持つ御方であり、神の意志について知っており、ご自身の将来と行く先を知っている御方なのです。

この研究（本）において、私はヨハネが書いたイエスの物語の重要な展開に焦点を合わせるように努めました。20章30～31節の結論が示すように、この福音書は信仰へと導くための論拠として書かれたと、私は信じています。それゆえ、物語と説教との間に、ヨハネはそうした論拠をどのように作り出そうとしたのか、私は指摘しようと試みました。第四福音書の著者はしばしば、反復と言及によって、そうした論拠を作り上げています。頻繁に、類似した考えは繰り返されるか、或いは福音書の始めの方で（特にプロローグにおいて）口火を切った諸々の主題は、物語の中で（物語が進むに連れて）実現します。私はこれらの内部にある前後参照の問題に注意を集中するように努めました。言い換えるならば、この研究で最も力を入れていることは、第四福音書を書くにあたっての、福音書記者自身の目的をよりよく理解することです。

デューク大学で以前、私の指導教授であったD・ムーディー・スミス教授には、第四福音書についての私の研究（調査）を鋭敏なものにしてくださったと共に、すべての福音書に関する真摯な研究についての興味を喚起してくださったことに、感謝しています。また、神学校時代の教授であり、亡くなったビューフォード・ブライアント教授にも、福音書における興味を持つ切っ掛け

を与えてくださったことに感謝しています。私はまた、ミリガン・カレッジとエマニュエル神学校で、ヨハネ福音書の授業を取っている両校の学生たちにも感謝します。この研究（本）に表れる諸問題の幾つかを考えるにあたって、学生たちとの学びは有益でした。私の研究助手であるジェイソン・エヴァンズは、私の同僚であるクレイグ・ファーマー博士と同様に、文体や読み易さについて多くの有益な意見を与えてくれました。

注意：福音書における幾つかの諸問題についてもっと多くの情報を得たいと思う人は、良い注解書が役に立つでしょう。あなたは、ジェラルド・スローヤンが書いたインタープリテーション・コメンタリーの『ヨハネ』（アトランタ、ジョン・ノックス・プレス、1988年）を手に入れたいと思うでしょう。このバイブルスタディ・シリーズは、『インタープリテーション』に基づいています。他にも、とても興味深く読める注解書は、D・ムーディー・スミス Jr. が著した『ヨハネ』（ナッシュビル、アービンソン・プレス、1999年）です。非常に詳しく、しかしヨハネ研究において尚も古典であり続けるのは、アンカー・バイブル・シリーズから出ているレイモンド・ブラウンが書いた2巻本の注解書です。良い聖書辞典もまた、非常に役立ちます。この研究（本）では、一部のテキストを強調するために自分自身で訳した箇所を除き、全体を通じて聖書は新改訂標準訳聖書（NRSV）[本訳書では基本的に『聖書 新共同訳』を用いる]を使用しました。

Unit 1 ヨハネ1章

言に関する証言

第四福音書は、イエスについての物語です。しかし第四福音書はまた、信仰の論拠としても構成されています。私たちはおそらく、常に福音書の始めを、著者の目的を心に留めながら読むべきでしょう。著者の目的とは、次のことです。「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさったが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである」(ヨハネ20章30～31節)。本書(ヨハネ福音書)の始まりは、特にイエスとは何者か、イエスとイスラエルの神との関係、および地上におけるイエスの伝道の目的といった問題に集中しています。それは徹底的に神学的な序文ですが、しかし同時に信仰(を支持するため)の論拠を用意することを意図した序文でもあるということです。

序文(1章1～18節)

ヨハネ版のイエス物語は、(マタイとルカがそうであるような)イエスの誕生で始まるのではなく、(マルコがそうであるような)最初の伝道で始まるのでもありません。むしろ詩で始まっています。第四福音書記者は、ただちに物語を始めるよりもむしろ、よく考えた文学形式、哲学的な熟考を、福音書の序文を書くために用いています。そうすることで、著者は彼の目的の何かに信号を送っているのです(合図しているのです)。著者の目的とはすなわち、この福音書はイエスの重要性について熟考するためのものであり、単にイエスの生涯を物語るためのものではない、ということです。詩の言語を用いることにより、第四福音書記者はイエスを、時間と人類(人間)の経験の外に置いています。——イエスは真に、宇宙的で永遠の重要性を持っているのです。しかしこれは、完全に無限な詩というのでもありません。なぜならそれは、歴史のイエスともまた、相互に影響するからです。ヨハネの序文では、時間と永遠が出会

い、そして両者はお互いに解釈し合っているのです。

同時に、冒頭の詩は、福音書の始めから終わりまでずっと共鳴する多くの主要なテーマを注意深く予期しています。その主要なテーマとは、イエスと神は一つであるという関係、(光と闇のように) 信じる者たちと信じない者たちとの明確な区別、イエスの生涯は栄光の啓示であったこと、歴史における出来事としての受肉の重要性、イエスを拒絶することは闇が人類を覆い包んだことの表れであること、そして、読者がイエスを信じるようになるための論拠において、証言と証拠が果たす特別な役割といったものです。この詩はまた、それに続く物語に舞台を整えるよう入念に構成された修辞学的な考案(仕掛け)でもあります。

序文(プロローグ)の根本的な目的(意義)は明らかです。イエス・キリストは単なる預言者あるいは救済者ではなく、本当に神の言葉そのものの受肉であり、神の積極的な力は世界の創造と命をもたらすことを必然的に含むということです。このように人間の形を取った(人間となった)イエスとは、神の証明であり、神が近くに来られたのであり、人類を神のもとへ連れ帰るために来られた神なのです。しかし根本的な目的(意義)は明らかであるにもかかわらず、使用されている詩の言語は難解さを示しています。しかしこれらの難解さは、読者がその目的(意義)をより深く熟考するよう促すものに過ぎないのです。

A. 詩の構造

三つの大きな衝動がこの詩を支配しています。一番目は、言を神の創造的で生命を与える活動と同一視するものです。二番目は、イエスにおける言の受肉、神の栄光が啓示されたが、多くの人々によって受肉は拒絶されたことが述べられています。三番目は、イエスについての証言に基づく、言に対する信仰の役割を強調することです。しかし、詩の中のこれらの衝動は、実際にはどのように展開するのでしょうか？

詩については、三つの大きな単元で構成されていますが、(それぞれの単元

は) 中断されていると言えます。最初の大きな単位である1節から5節は、言について論じており、言と神との関係、および創造の御業における言の役割について論じています。二番目の大きな単位である9節から13節では、主題は世における言の役割です。そして三番目の大きな単位である14節から18節では、主題は人間としての言の命に対する信仰共同体の証言です。それゆえに(詩の)流れは、宇宙的な役割から地上の伝道へ、そして最後には、信じる者たちとの特有の関係へと進んでいるように思われます。

プロローグの最初の単位は、歴史の外および人間の経験を超えた領域から始まります。「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。彼は、初めに神と共にあった。万物は彼によって成った。成ったもので、彼によらずに成ったものは何一つなかった。彼の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を打ち負かすことは出来なかった」(ヨハネ1:1-5、著者の訳)。

「初めに…」とありますが、第四福音書の著者が読者たちに、この詩の最初の節に創世記の冒頭の言葉がこだましているのを「聞く」よう意図していることは明白です。いったん創世記における創造物語と関係させてみると、プロローグにおける他のイメージも理解できるようになります。創世記において、神は天地(世界)に生じるよう「言われます」。ヨハネは言であるロゴスを万物の創造者として言及しています。創世記では、光は最初に創造されたものであり、神はその後、光と闇を分けます。そしてヨハネは言葉のことを、暗闇の中で輝く光として述べています。そのように、プロローグの冒頭の数節は、創世記の有名な最初の数節との対話であり、時が始まる前の神の創造の衝動(推進力?)という点から、イエスの物語を縁どる務めをなしています。

しかし同時に、詩の最初の単位は、イエスの生涯と死のドラマを先回りして述べています。「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を打ち負かすことは出来なかった」。この最後の節は、創造物語には本来備わっていなかった暗闇と

光との戦いについて紹介しています。創世記における暗闇とは夜を、或いは光が創造される以前の状態を指していると思われます。しかしヨハネは暗闇を、光と真っ向から対立する霊的な質として理解しています。さらに詩は、暗闇が光を打ち負かし征服しようと試みたが、そうすることはできなかったことを暗に示しています。これは受難物語についての最初の暗示ではないでしょうか？もしもそうであるならば、キリストの死は神が人間となって現れたと見なすゆえに、詩の最初の語法においてヨハネは既に受肉について示していたことになります。

しかし今は、受肉（の問題）に直接移ることはしません。見たところ詩は、洗礼者ヨハネの紹介によって中断されており、彼は単に「ヨハネ」と呼ばれています。このヨハネは光について証しをする者であり、光そのものではないと定義されています。この区別は、前の単元の最後の文において、著者が既に人間イエスについて考えていたことを明らかに示しています。洗礼者ヨハネについての言及は、私たちを突然イエスの歴史的な状況へと連れて来るのです。更に重要なことは、著者の心の中で、説得の役割がどれほど根本的なものであるかを、それ（区別）が示していることです。ヨハネは、言であり光であるイエスの真の本質を証しする者です。証言というものは、歴史的な出来事を説得力をもって立証するのに重要です。このように福音書全体は、読者にイエスの本質と人格（イエスが人となられたこと）を信じさせるように意図されているのです。

ここには第四福音書の記者が、洗礼者ヨハネとは何者であったのかについて誤解する可能性があることを知っていたというヒントがあります。第四福音書記者は、洗礼者ヨハネとイエスを識別するために尽力していることに注目しなければなりません。洗礼者ヨハネは光について証しをする者ですが、光そのものではありません。1章15節において、洗礼者ヨハネは再び証言者であり、自分はイエスに従属する者であることを断言しています。1章20節では、洗礼者ヨハネは「私はキリストではない」と、明白に宣言しています。そして3章25～30節では、洗礼者ヨハネは自分がキリストではないこと、イエスの伝道が進

むにつれて、ヨハネ自身の重要性は減少して行くことを、再び反復しています。福音書記者は、洗礼者ヨハネの役割を明らかにすることに熱中しているように思われます。洗礼者ヨハネの役割とは、彼が先駆者であると共にキリストを証する者であり、彼はキリストではない、ということです。

第二の主要な思考の単元は、前の単元に出て来た世の光としての言についてのテーマを再び拾い上げています。「彼は真の光で、世に来てすべての人を照らすのである。彼は世にあった。世は彼によって成ったが、世は彼を認めなかった。彼は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった。しかし、彼は自分を受け入れた人、彼の名を信じる人々には神の子となる資格を与えた。この人々は、血によってではなく、肉の思いによってではなく、人の思いによってでもなく、神によって生まれたのである。」(ヨハネ1：9～13、著者による翻訳)。

言の受肉についての概念は、明瞭ではありませんが、第二単元においてはさらに強くなっています。「彼は世にあった」および「彼は自分の民のところへ来た」は、真の光である言が、平凡な人間の出来事の中に入って来ることを暗示しています。著者は「世」という新しい概念を導入しています。これは人間の出来事、歴史への言及でしょうか、或いは、この用語にはもっと深い意味があるのでしょうか？ヨハネにとって、「世」は多様な意味を含んでいます。「世」は神の愛の対象であり、神の裁きの対象ではありません(3：16～19)。しかし世は光を受け入れないことによって、自らを裁いてしまっているのです。イエスは「この世」に属してはいませんが(8：23)、命をもたらすため世にきました(6：33)。彼は父のもとから世にきましたが、世を去ることによって父のもとに戻るのです(16：28)。世はイエスの伝道の対象です。しかし世はイエスを受け入れず、イエスの弟子たちを憎みました(17：14)。第四福音書記者にとって、「世」という用語は墮落した人間の所在地を指していますが、神からの伝道の対象なのです。「世」は別個の(distinct)「場所」であり、「時」なのです。それゆえ、プロローグの第二単元において、言が世に入るということは、イエスの受肉を示しています。そして再び、十字架において完成する根

本的な闘いをあらかじめ述べています。世は、特に自分の民は、言を受け入れなかったのです。

詩のこの單元には、物語の構造が大雑把に描かれています。イエスは世に來ますが、世は創造におけるイエスの役割を知らない（気づかない）のです。これはおそらく、真の創造神である、族長たちの神を知らなかった異邦人の世界について言及している、全般的な陳述のように見えます。しかしヨハネは、イエスが自分の民のところへ來たと、続けて言います。自分の民とは、ユダヤの人々を意味しているかもしれませんが。そしてこれらの人々は、神を知らないのではなく、神の言を受け入れないのです。ここにはイエスの生涯のドラマがあります。そのドラマとは、神の啓示を受けた民によって拒絶されるというものです。しかし最後に、神はご自分の民を血筋によって造るのではなく、イエスおよび受肉における神の業を受け入れる人々を用いることによってお造りになるのです。

詩の第二單元は、イエスこそ神が受肉した御方であることを信じるよう、読者を説得するという、福音書の最も大切な関心事を反復しています。最後の節は中心的な重要問題である信仰について明らかにしています。信仰（ギリシア語のピステイス）は、根源的には説得という概念を持っています。人は出来事が真実であると納得した時に信じるものです。著者はここで、イエスの名を信じることは、非常に強力な重大なことであるゆえに、人が神の子として生まれ変わることを可能にする、とみなしています。しかし、「彼の名を信じる」とは、何を意味しているのでしょうか。これはもちろん、その後の物語、すなわち福音書が明らかにするでしょう。しかしさしあたり、著者は種を蒔く、これが決定的に重大な問題なのです。

第三單元で、受肉の意味は完全に明らかにされます。「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちは彼の栄光を見た。それは神からの独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。ヨハネは彼について証しをし、叫んだ。『わたしの後から來られる方は、わたしよりも先におられた。なぜならば彼は最初からおられたからである』」。彼の満ち溢れる豊かさの

故に、私たちは皆、恵みの上に、更に恵みを受けた。律法はモーセから与えられたが、恵みと真理はイエス・キリストを通して現れたからである。いまだかつて、神を見た者は一人もいない。父のふところにいる神の独り子、この方が神を示されたのである」(ヨハネ1:14~18、著者による訳)。言の受肉という明らかな陳述によって、イエスこそ神が肉体をまとして現れた御方であり、それまで見たことのない神の栄光を示す神の独り子(或いは、唯一無二の神の子)であることを、私たちは知るのである。

再び、著者はイエスについての洗礼者ヨハネの証言の重要性に戻ります。ヨハネの証言は15節だけに含まれているのか、それとも18節まで及んでいるのかは明らかではありません。もしも18節まで及んでいるならば、洗礼者ヨハネは、第四福音書記者が既に述べたこと、すなわち、イエスはモーセよりも更に力強く、神の栄光を独特な仕方ですべての者を断言する者として示されていることになります。

詩の構造と、その思想をそれ自体がどのように展開するかを調べてみると、周期的に起こるテーマが連続する「波(うねり)」の中で発展していることは明らかです。言は人間に光と命をもたらすため世に來たことが、最初の單元では漠然と紹介されていました(「光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を打ち負かすことは出来なかった」)。その後、第二單元では、もう少し強く紹介されています(「彼は世にあった。世は彼によって成ったが、世は彼を認めなかった」)。そして第三單元では、明瞭に紹介されています(「そして言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」)。同じように、説得の関心は、洗礼者ヨハネについての紹介で始められ(「彼は証しをするために來た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである」)、第二單元(「その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」)で二度目に起こり、第三單元(「ヨハネは彼について証しをした」)でも反復されています。そして初めから終わりまで、受難物語が予期されています。最初の單元では、簡素な言及(「暗闇は光を打ち負かすことは出来なかった」)が受難物語を示しています。第二單元では、その(受難物語の)予想はさらに強くなっています

〔自分の〕民は〔彼を〕受け入れなかった。著者は見解を示すのに直線的な方法を取るのではなく、続く物語を予期し解釈するイメージを確立しながら、異なる形で見解を繰り返しています。

B.「言」についてのヨハネのメタファー(隠喩)の背景

第四福音書記者がプロローグにおいてイメージと概念を巧みに利用していることは明かです。イメージは先在の概念に依拠しており、言及によって、キリストの出来事に対する読者の理解を高めます（私は既に、最初の数節が創世記の第1章にどれほど依拠しているかを述べました）。この創世記とその広く知られた概念を用いることは、隠喩的であると共にほのめかしでもあります。これは特に、非常に隠喩的な「言」というヨハネの用語に当てはまります。しかし前からある文献或いは概念に対して、読者はこの用語を、その十分な意味を引き出すために、比較すべきでしょうか？

旧約聖書には、神が語るおびただしい数の例があります。「語ることによる“speaking”」創造に加えて、神は預言者を通して語ります。預言的託宣はしばしば「主の言葉」と呼ばれます（エレミヤ書1：4を始め、他にも多くの例を参照せよ）。対照的に、「主の言葉」はしばしば、単に律法、トーラーを示す用語として用いられています（例えば、主の言葉がトーラーと直接に並置されているイザヤ書2：3を参照せよ）。しかしどちらの使用法も、第四福音書記者がその用語を用いるに当たって理解しているところの、独立した宇宙論的特質が欠けています。

ヨハネ福音書におけるロゴス概念の起源がギリシア哲学、特にストア哲学にあるということは、しばしば言われてきました。ストア哲学では、ロゴスは神、人間、そして創造の秩序を結び合わせる根本的な質です。「将来の発展のもとになる用語」（ロゴス・スペルマティコス）は、宇宙に行き渡る神の要素と言われますが、人間は理性的であるゆえに、人間の中に存在しています。ロゴスという言葉は、話し言葉と同様に（同じくらいうまく）、理性的な思考と秩序を意味することが出来るので、万物の秩序と神とのこの関係は宇宙論的に

なりますー世における創造の力は（小文字の）「言葉」です。しかしヨハネ福音書では、（大文字で始まる、神の存在としての）「言」は、この世と無関係な存在ではなく、さらには人間と無関係な存在というのでもありません。むしろ、「言」は独特に、神の独り子としてのイエスに当てはまるのです。もしもヨハネがプロローグとストア哲学を読み比べることを読者に望んでいたとしたら、それは類似の比較ではなく、相違の比較をもたらすためだったことでしょう。

ヨハネが「言」という用語を用いる概念背景については、イスラエルの知恵伝承にあるという可能性は更に大きいと思われます。これらの伝承は旧約聖書の箴言や聖書外典のシラ書およびソロモンの知恵に見受けられます。ユダヤ教の知恵文学では、神の知恵は独立しており、世界の創造と維持に含まれているものと見なされています。

主は、その道の初めにわたし（知恵）を造られた。

いにしへの御業になお、先立って。

永遠の昔、わたしは祝別されていた。

太初、大地に先立って。

箴言 8章22～23節

わたし（知恵）はそこにいた

主が天をその位置に備え

深遠の面に輪を描いて…

大地の基を定められたとき。

御もとにあって、わたしは巧みな者となり

箴言 8章27、29、30節

わたし（知恵）はいと高き方の口から出て、

霧のように大地を覆った。

わたしは高い天に住まいを定め、
わたしの座は雲の柱の中にあった。

シラ書 24章3～4節

知恵はあなた（神）と共にいて御業を知り、
世界をお造りになったとき、そこにいました。

知恵の書 9章9節

この知恵は、それ（知恵）に頼る者に命を与えると見なされています。

わたし（知恵）を見いだす者は命を見だし
主に喜び迎えていただくことができる。

箴言 8章35節

わたしは彼女（知恵）によって不滅を得た。

知恵の書 8章13節

知恵はまた、光と啓示の源と見なされています。

彼女は永遠の光の反映、
神の働きを映す曇りのない鏡、
彼（神）の善の姿である。

知恵の書 7章26節

このように、ヨハネ福音書の著者は、聖書とユダヤ教の伝承を熟知している人々が既によく知っていた知恵についての伝承を用い、永遠および宇宙論的な視点からイエスを解釈するにあたってこの概念を用いたように思われます。

洗礼者ヨハネの証し（1:19-34）

プロローグ（序言）の後、第四福音書記者は物語を洗礼者ヨハネから始めます。しかし読者がまず初めに聞くのは、荒野におけるヨハネの説教でもないし、ヨハネが洗礼を授けることでもありません。事実、このヨハネこそ本当に洗礼者であると分かるためには、読者はもう少し読み進まねばなりません（25、28、31-34節）。その代わりに洗礼者は、自分がキリストでもエリヤでもなく、“あの預言者”でもないという、彼自身の「証し」の言葉によって紹介されます。そして他の福音書がヨハネに言わせているのと同様に、彼はイザヤ書40章3節の言葉を引用しながら説教しています。

ヨハネの証しは実に多様であり、福音書が始まる最初の節において、読者に重大な情報を知らせています。

1. まず初めに、ヨハネはユダヤ教の指導者たちに、自分は“どういう存在ではないか”という点から、正体を明らかにします。この明白な否定は、特定の質問に対する応答として為されたものであり、それによってイエスは何者かという答えとなってゆきます。ヨハネがキリストでないならば、誰がキリストなのか？ヨハネが“あの預言者”でないならば、誰が“あの預言者”なのか？ヨハネがエリヤでないならば、誰がエリヤなのか？これらの質問は同時に、ユダヤ教の指導者たちがイエスは何者であるか認めることが出来たであろうことを指摘します。なぜならば、彼らは明らかに、キリストが来ることを待ち望んでいたからです。その時のヨハネの最初の証しは控えめですが、後に来る積極的な身分証明の場を同時に用意しています。
2. イエスの到来を予期することがヨハネの証しのテーマですが、そのことは二度目の問答によって明らかにされます。ヨハネはなぜ洗礼を授けるのかと尋ねられると、彼は水で洗礼を授けるが、彼の後に、もっと偉大な方が来ると答えます。そして再び、来るべき方とは自分のことではない、と否定します。そして「わたしは水で洗礼を授ける」という不思議な言葉は、誰か他の人が別の手段、すなわち聖霊によって、洗礼を授けることを暗示しています。

3. イエスを見るとすぐに、ヨハネはイエスが何者であるかを告白しています。「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ!」。さらに、この方こそヨハネが言ってきた人物、すなわち、自分の後から来られる方であると、少しも疑うことなく述べています。この言葉が、救世主としてのイエスの特別の役割を言い表していることは明かです。「神の小羊」はよく、過越祭で犠牲となる過越の小羊を指して言われます。特にイエスは一第四福音書の記録では一過越の小羊が屠られるその日に息を引き取られるので、この言葉は非常に魅力的な（心を動かす）説明となります。しかし過越祭の小羊は、決して犠牲ではありません（過越祭は祭りであって、贖いの犠牲ではなかった）。しかも罪を取り除く象徴でもありません。もっと暗示的なのは、イザヤ書53章との関係です。そこではイスラエルの苦難の僕が、屠り場に引かれて行く小羊と連結されています。この僕は「償いの献げ物」（イザヤ53：10）と呼ばれています。ヨハネが用いる「神の小羊」という言葉の背景もまた、旧約聖書の中の小羊の献げ物について述べている箇所（日毎の献げ物について述べる出エジプト記29：38-46、或いは、個人の贖罪の献げ物について述べるレビ記4：32）にあるのかもしれません。しかし第四福音書記者は、その用語について説明しません。その代わりに（それ故に）、この用語は読者に対して、続く物語で使用される内容のタペストリー（訳者注：糸で織り込んだつづれ織りの高価な布で、壁掛けなどに用いる）を作り、蓄えることになるといった、イエスに対する種々の用語の一つとなっています。
4. 第四福音書は、イエスの受洗について明白には述べていません。その代わりとして、読者は、ヨハネがイエスに洗礼を授けたと明記している他の福音書と比較したりすることによって推測せざるを得ないのです。しかしヨハネは、聖霊が鳩のようにイエスの上に降ったことについては詳しく話しています。ヨハネは続けて、霊が降ったこの人こそ、聖霊によって洗礼を授ける方である、と話しています。イエスによって授けられる洗礼は、ヨハネが授ける洗礼とは質的に異なるものであり、より良いもののなのです。この言及もまた、イエスの宣教についてあらかじめ述べるものであると共に、もっと重要

なことは、イエスの死によって聖霊が遣わされることも述べられている点です（ヨハネ16：5-15、20：22）。

- 最後にヨハネは、イエスが神の子であるという荘厳な証しをします。この証しは、イエスが父の独り子であるというプロローグ（序言）の記述と響き合っています。この言葉はイエスが預言者以上の方であり、まさに神の独り子であることを証明します。プロローグ（序言）は既に、洗礼者ヨハネの証しについても述べており、ヨハネの証しはプロローグ（序言）の言葉をさらに明白にしています。

最初の弟子たち（1:35-51）

洗礼者ヨハネによるイエスについての証しの後、福音書はイエスが弟子たちを集め始めるといふ短い一連の物語を取り上げます。そこに登場する弟子たちは、最初は洗礼者ヨハネに従っていたと記されており、彼らがイエスに従うようになったのは、洗礼者ヨハネ自身によるイエスについての宣言がきっかけです。洗礼者ヨハネの証しによって、アンデレはイエスがメシアであると告白した上に、彼の兄弟であるシモン・ペトロをイエスのもとに連れて来ます。この場面は、次の日イエスがフィリポを召し出す場面へと続きます。そしてフィリポはナタナエルに証しをし、ナタナエルはイエスが神の子であることを理解し、そのことをイエスに告白するのです。

この短い物語は、洗礼者ヨハネとヨハネの弟子たちとを繋ぎ合わせるという役割を担っています。しかしもっと重要なことは、証しの意義とイエスが何者であるかということが承認される点にあります。アンデレはイエスがメシアであることを、ナタナエルはイエスが神の子であることを直ぐに理解します。これらの人々もまた、イエスを証しする者となるのです。そして彼らは、イエスが来たことを人々が信じるようになるために、任務を実行します。しかし、ナタナエルがイエスによる預言的な言葉によって信じたという、イエスの驚くべき言葉は、信仰は他者にとってそう容易なことではないことを暗示しています。そしてナタナエルはもっと偉大なことを見るようになるというイエスの言

葉は、後に来る「しるし（奇蹟）」を前もって述べているのです。

イエスの称号

第四福音書の最初の章は、後に続く物語を読者にあらかじめ準備するという役割を担っています。後に続く物語は、奇蹟や説教を豊富に含み、衝突や死について物語っています。読者にイエスの宇宙的なパースペクティブを与え、レトリックと説得の言葉を用いることで、著者は積極的に、イエスが本当に何者であるかを読者が決心するよう従事させています。信仰の決断という点において議論を組み立てようというもう一つの要素は、第四福音書の最初の章の著しい特徴です。すなわち、著者はイエスに適用される多種多様なメタファー（隠喩）や称号を用いたので、1章の終わりまでに、私たちはイエスこそ実に最も重要な御方であるという印象を受けるのです。一連の称号は、その範囲内では目もくらむほどの多さです。ざっとおさらいすると、イエスが登場するための準備として用いられている用語が、広く包括的であることが分かります。

- ・プロローグでは、イエスは言、命、光といった宇宙と万物における基礎をなす隠喩において正体が明らかにされます。
- ・称号の第二のグループは、神の立場からイエスご自身の正体を明らかにします。「父の（独り）子」、「神の子」、そして「神によって選ばれた御方」といった、関係を示す用語です。
- ・称号の第三のグループは、イエスの役割という面から正体を明らかにする機能上の用語であり、キリスト（20節）、キリストを示すヘブライ語のメシア（41節）、イスラエルの王、そしてラビ、等がそれです。
- ・最後に、イエスは「神の小羊」「神の子」といった預言的或いは黙示的用語によって言及されています。

第四福音書記者は福音書の最初の部分を終えるにあたり、読者が実際に啓示的な知識によって物語を読むように準備を整えました。そこには、イエスとは

何者であるかといった疑念は全くなく、(むしろ)これから生じる衝突の暗示があります。論争の青写真が明らかにされているのです。これから続くことは、イエスを信じることへの弁証論であり、その弁証論は、しるし(奇蹟)によって確証され、さらに証言により、そしてイエスご自身の証言によって強固にされるという構造になっています。

？さらに深く考えるための問い

1. マタイ福音書とルカ福音書はイエス誕生の物語で始まっていますが、ヨハネ福音書はそうではありません。あなたはこれを重要なことと思いますか？
2. ヨハネ福音書1章1～18節と、創世記1章1節～2章3節とを読み比べてみてください。両方の記事には、どのようなテーマが現れていますか？著者がこの比較を望んだとしたならば、それは何故だと思いますか？
3. 来るべきキリストに対する洗礼者ヨハネの最初の証言は、「わたしはメシア(キリスト)ではない」という否定的なものでした。この証言が非常に重要なのは何故ですか？
4. イエスに言及するために用いられている異なる称号のリスト(18頁)を読んでください。これらの異なる称号は、イエスについて何を伝えようとしていたのですか？

-
- 1 本書の著者であるマーク・A・マトソン氏は、アメリカのテネシー州にあるミリガン・カレッジの聖書学教授である。
 - 2 本書の訳本は、2019年度中に日本キリスト教団出版局より刊行される予定である。尚、欄外のコラムに関しては、印刷の都合上、ここには掲載しないこととした。